佃・月島界隈

国立がんセンター中央病院
田仲　隆

私の住んでいる佃・月島地区では，３年に一度の住吉神社の本祭りが８月２，３，４日の３日間でありました．獅子頭の宮出しから始まり八角神輿（みこし）の宮出し，神輿を船に乗せて氏子地域を回る船渡御出船が行われました．町内の山車（だし），大小の神輿も出るなどしてお祭り気分は絶好調でした．夏祭りとあって水が雨のようにかけられ，暑さと興奮の熱気を冷ますとともに，力水にもなりました．住吉神社の由緒は家康公が関東下降の際，摂津国佃の漁夫33人と住吉の社の神主が分神霊を奉載し江戸へ下り，幕府より鉄砲洲向かいの干潟を賜り築島にしました．その後，故郷の名をとり佃島とし，この地に社寺を定めたのが，佃住吉神社の起源です．住吉神社の神輿は八角神輿と呼ばれ，まさに八角形の神輿です．天皇陛下の高御座を模したといわれています．大祭中には六本ののぼりがたてられます，その柱や抱木（柱を支え木）は，空気に触れて木が腐らないように，３年間，川底に埋められています．本祭りの年，水の引く干潮時を狙って掘りおこされます．また，白色の黒木鳥居（皮をはいだ生木の鳥居）が臨時に仮設され，島全体が境内となるのも珍しいと思います．佃はもちろん佃煮の発祥の地であり，現在は３軒の佃煮屋さんがあります．朝の仕込み時には甘い醤油の匂いが漂います．

佃・月島地区はたびたび刑事ドラマのロケ現場にも使われています．殺人事件で，刑事と検視官そして剖検のシーンがよくでてきます．現状では検視官や法医学者がまったく足りず，異常死の剖検率がきわめて低くドラマのようなシーンがなかなかできないようであります．病院においてもさまざまな理由により剖検数は低下しています．この問題に対してMRI・CT・USなどの画像診断機器が，剖検の補助検査ないしは代替検査としての可能性があり，Ai（オートプシーイメージング）「死亡時画像病理診断」の名称で研究が行われています．江澤英史著『100万人のオートプシーイメージング（Ai）入門』によれば，Aiは画像診断と病理診断の融合物であり，Aiにおいてはじめて，画像診断情報と病理所見の純粋比較が可能になり，その利点は①Ai画像自体の情報量が豊富である．②死亡時という普遍的な特異点の画像である．③剖検を行えなかった症例（100人中96人）でも，Aiならば施行できる可能性がある（遺体損壊をともなわないから）．④剖検を承諾してくださった症例に関しては，Aiを追加しても遺族の方に余分な負荷はかからない上，得られた医学情報は累乗的に増加する．⑤Aiを行った後で剖検を行うかどうか判断することも可能になる．これらのことから，Aiが次世代の死亡時医学検索のエースになるだろうといっています．

当センターでも遺族が剖検を拒否する場合があるようです．そのような時，一般的になってきたCTやMRIでの検査なら傷をつけることもなく，全身を検査することができます．CT装置は解像力に優れ，シングルCTでも30分以内で検査が可能です．CT装置でのAi症例が多い，その理由は，短時間にできること，設置台数が多い，また，各病院でのCT装置が更新時期にきて市場にも出てきている．さらには画像診断や画像処理技術向上によるものと思われます．MRI装置はコントラスト分解能に優れ，シーケンスを替えての撮像でも約１時間で終了します．造影剤が使えない状況を考えると，MRIでのAiも有効であり，CTと同様に画像診断や画像処理技術が向上しています．剖検率が少ない現状を考えると，積極的にCTやMRIでのAiを行うべきでありますが，まず，Aiの考え方を広めていくべきではないでしょうか．